

2024年度国際日本学コンソーシアム【報告要旨】

見える動物と隠れる人間 — 『鳥獣人物戯画』甲巻をめぐる —

北京外国語大学
北京日本学研究センター
潘 蕾

絵巻物というと、文学作品を分かりやすく要約した民衆的な芸術と見なされがちであるが、院政時代の絵巻制作に関して言えば、天皇家が主導的な役割を果たしていたと思われる。日本の四大絵巻として高く評価される『源氏物語絵巻』、『信貴山縁起絵巻』、『伴大納言絵巻』と『鳥獣人物戯画』はいずれも院政時代の作品であり、当時の絵巻制作はいわゆる国家的事業であった。

第77代後白河天皇は若い頃から当時の流行歌である今様に熱中し、文化の持つ力を強く意識し、様々な文化活動を展開したが、長寛二（1164）年頃に平清盛が後白河院のために造進した蓮華王院に納められる宝蔵はその一端を示している。平清盛が日宋貿易に関わった動機の一つは蓮華王院宝蔵に入る宝物を求めたためであろう¹との指摘があるほど、蓮華王院宝蔵の収蔵品は典籍・楽器・絵画など多岐にわたっている。絵巻物として、『年中行事絵巻』、『保元相撲図絵巻』、『承安五節絵巻』、『粉河寺縁起絵巻』、『後三年合戦絵巻』、『伴大納言絵巻』、『吉備大臣入唐絵巻』、『彦火々出見尊絵巻』、『病草紙』、『餓鬼草紙』、『地獄草紙』などが納められていたと思われ²、そのほとんどの制作には後白河院の意志が反映されていると考えられる³。

一方、京都の高山寺に伝来する絵巻『鳥獣人物戯画』は甲・乙・丙・丁の四巻からなり、うちの甲・乙巻は院政時代に制作されたと考えられている。『鳥獣人物戯画』の甲・乙巻の作者について、従来より絵仏師と宮廷絵師の二説に分かれていたが、五月女晴恵氏は『鳥獣人物戯画』甲・乙巻と『年中行事絵巻』と『伴大納言絵巻』の三者は同様の制作の場から誕生した可能性を指摘し、その企画した人物として、後白河院を挙げている⁴。

後白河院の主導のもと制作された絵巻物の内容を見ると、行事絵と物語絵に大別することができる。行事絵である『年中行事絵巻』と物語絵である『伴大納言絵巻』は共に王権の支えとなる都を舞台とするが、そこに描かれ・語られているモノ・コトに類似するものが『鳥獣人物戯画』甲巻にも確認することができる。ただし、『年中行事絵巻』と『伴大納言絵巻』のように人間が登場するのではなく、『鳥獣人物戯画』甲巻には兎・蛙・猿をはじめとする動物たちが人間の振る舞いを模した姿で登場する。しかも、通常の絵巻とは異なり詞書がないため、動物たちの振る舞いは謎に包まれている。

本研究では、『鳥獣人物戯画』甲巻に描かれているモノ・コトの分析を通じ、甲巻の制作者及び企画者を再検討した上、人間の登場しない甲巻には人間のいかなる営みが託されているかを考えてみる。

¹ 五味文彦『絵巻で読む中世』、筑摩書房、2005年、p.63。

² 増記隆介・皿井舞・佐々木守俊『古代国家と仏教美術 奈良・平安時代』、天皇の美術史1、吉川弘文館、2018年、p.76を参照。

³ 五味文彦・佐野みどり・松岡心平『中世文化の美と力』、日本の中世7、中央公論新社、2002年、p.210。

⁴ 五月女晴恵『「鳥獣人物戯画」甲・乙巻の研究』、東北大学博士学位論文、2004年。